令和四年度

第六十八回青少年読書感想文コンクール

札幌市読書感想文コンクール

受賞作品集

小学校・中学校・高等学校

札幌市学校図書館協議会

後援・協賛

札幌市
札幌市議会
札幌市教育委員会
札幌市ＰＴＡ協議会
北海道高等学校ＰＴＡ連合会石狩支部
㈱光陽社
キハラ㈱北海道営業所
教育出版㈱　北海道支社
㈱北海教育評論社
㈱図書館ネットワークサービス
光村図書出版㈱北海道支社
㈱毎日新聞社　北海道支社
一般財団法人　札幌市教育協会
㈱平和堂
㈱清水書院　札幌営業所
東京書籍㈱　北海道支社
㈲新妻商事

目次

札幌市長賞　ネガティブの美点　札幌市立向陵中学校　二年　中本　夏央子

札幌市議会議長賞　その扉をたたく音を読んで　札幌光星高等学校　二年　野崎　幸子

札幌市教育長賞　「未来へのアクション」　札幌市立簾舞小学校　四年　バーン　アルバ優花

（特別賞）札幌市学校図書館協議会会長賞　本当の友だちとは　札幌光星高等学校　一年　白石　胡実

（特別賞）札幌市学校図書館協議会会長賞　思いをかなえるために　札幌市立桑園小学校　六年　杉田　知優

（特別賞）札幌市学校図書館協議会会長賞　医師になる覚悟　札幌市立信濃中学校　一年　坂本　温音

（特別賞）札幌市ＰＴＡ協議会会長賞　「夜と霧」を読んで　札幌聖心女子学院高等学校　三年　目良　茉莉香

（特別賞）札幌市ＰＴＡ協議会会長賞　「かしたつもり×もらったつもり」をよんで　札幌市立新川中央小学校　一年　山田　朝陽

（特別賞）札幌市ＰＴＡ協議会会長賞　兎の眼に映るタカラモノ　札幌市立向陵中学校　二年　岩永　千結子

（特別賞）北海道高等学校ＰＴＡ連合会石狩支部長賞　まだまだプロローグ　札幌光星高等学校　二年　櫻井　麻央

（特別賞）光陽社賞　ため息からの再出発　田中学園立命館慶祥小学校　四年　水柿　連太朗

（特別賞）キハラ賞　平等に生きるということ　藤女子中学校　一年　江口　陽加李

（特別賞）教育出版賞　色々な色の中のぼく　札幌市立南月寒小学校　六年　河口　留偉

（特別賞）北海教育評論社賞　表情は言葉　札幌啓北商業高等学校　一年　懸谷　一花

（特別賞）図書館ネットワークサービス賞　数学でりょうりを見ると　札幌市立厚別北小学校　二年　佐々木　英俊

（特別賞）図書館ネットワークサービス賞　つぐみから学んだこと　藤女子中学校　一年　田中　結衣

（特別賞）光村図書出版賞　日常の楽しみ方　藤女子中学校　二年　楠本　美那

審　査

審査基準

○　内容や主題を的確に把握し、自分の考えたことや感じたことを素直に書いているか。

○　身近な問題と結びつけて考え、読み手の生活がにじみ出るように書いているか。

○　表現に工夫のあとが見られるか。（論旨・構想・表現・表記など）具体的な観点として、次の七点がある。

①　作品を十分に読み込んでいるか。

②　作品から受けた感動・発見・喜びなど読み手の心情が表現されているか。

③　読み手の独特の受け取りが学年相応に表現されているか。

④　読み手の日常生活や考え方が、どこかににじみ出ているか。

⑤　本との付き合い、本との出会い、本を手にしたときの喜びなど、本に対する読み手の心がにじみ出ているか。

⑥　読書生活が日常の中に溶けこんで、自然な姿で読書しているか。

⑦　文体や語彙を工夫しているか。

○　本の選択に無理はないか。

○　応募規定に合っているか。

審査の方法

一　事務局で作品規定に従い整理。応募票は切り離し、作品に学年・対象図書別に通し番号を記す。学校名や氏名は審査段階で明らかにしない。

二　第一次審査により、第二次審査対象作品を選考。その選考にあたっては、一作品二名以上の審査員により評価し、協議の上決定する。

三　第二次審査では、佳作以上の該当作品を小学校・中学校・高等学校別に審査。担当審査員の協議の上、決定する。

札幌市長賞

ネガティブの美点

札幌市立向陵中学校　二年　中本　夏央子

「いちばんうまくできるのは、倒れたままでいることです。」これは、文豪カフカが書いたラブレターの一節だ。結婚を申し込んでいる文面とはとても思えないだろう。しかし、この文を見て、思わず笑ってしまったのではないだろうか。そう、カフカには、そんな魅力があるのだった。

カフカの人生は、それほど悪いものではなかった。幼い頃、親から受けた罰の数々は、カフカを苦しめ、後に恨みへと変わっていった。また、結婚や仕事、体の弱さが彼を悩ませた。しかし、「変身」など、彼はたくさんの名作を世に残していった。そんな彼は絶望することをやめず、たくさんのネガティブな名言を残した。彼の言葉は、なぜ人を笑わせる力があるのだろう。ネガティブの美点とは何なのだろうか。

一般的に良いとされるポジティブだが、私はよく空回りだ、と感じる。勉強が進まず、スマホのプレイリストを見て、明るい曲を探し、再生する。しかし、その明るさに、どうにも虚しくなってしまうのだ。そんな時、ネガティブな曲は良い。自分の苦痛の箇所を映し出してくれる。気持ちは完全に歌詞に乗り移り、おのずと共感から活力へ変わる。そんな力がネガティブにはあるのだ。必ずしもポジティブが良い訳ではない。ネガティブにも笑いや活力に変えられるという美点があるのだ。

他のカフカの言葉はどうだろう。「ひとりでいれば何事も起こらない。」なんと、自ら一人でいることを望み、その上、喜び、悲しみといった行動にともなう感情まで、封印しようとしてしまっているのだ。これでは、苦しいことがなくなるどころか、楽しみさえも忘れていってしまう。それほどにまで、カフカは日々、自分の無力を感じていたのだ。しかし、あなたにもきっとあるだろう。自分を傷つけないために、動かなかった経験が。だからこそ少し理解できるのではないだろうか。ネガティブは、時に相手を自分への理解に導くことができる、という美点もあるのだ。

ここまで、ネガティブの美点について見てきたが、その影響力はどのぐらいなのか。

ネガティブの影響力はポジティブに比べ、とても高い。特にメディアはそういった言動を拾い上げがちだ。陰湿なメッセージばかり届けられている社会。それが現実だ。しかし今、私がピックアップするべきと感じるネガティブは、そういった人を咎める言葉ではない。人を笑顔にする言葉である。

美辞麗句。そう思うかもしれない。しかし日々の生活の中で何かと思い悩むことが多い今、ポジティブでは作れないネガティブの笑い、を大切にするべきだと思うのだ。

カフカは今の時代において、その先駆者だと思う。カフカの言葉達に私は助けられた。行動に行き詰まった時、彼の言葉は、私より絶望している自身の存在を示してくれ、希望と笑いをもたらしてくれたのだ。なぜだろう、彼の言葉達は自分の心にすっと届いた。ポジティブな言葉より確実で、ふわふわした浮ついた部分が無い。浮世離れした陽気さは無く、鋭くて端的なイメージを持たせる。私はこんなカフカのネガティブな言葉のとりこになった。

しかし、そんな絶望ばかりのカフカも、絶望していない。むしろ喜んだことがある。

自身の病気である。彼は結核になった。そしてそれを「武器」だと言っているのである。理解に苦しむだろう。実は彼はこの病気によって、いろんな問題を解消させたのだ。将来の結婚。これはあきらめるための理由にすることができた。そして仕事は、嫌で仕方なかった勤めも、休暇と給料、最終的には年金付きの退職が許可され、華々しく終わった。彼は本当に病気による利益を感じていたのである。

彼のように病気に喜ぶ人間は、なかなかいない。彼にはポジティブな一面もあったのだ。

私はポジティブが悪い、減らすべきだ、などと言っている訳ではない。人間の暗い部分にも光を当て、見てみることの面白さを伝えたいと感じている。

「さびしさが足りない。」五時間ほどを一人で歩いた後の、カフカの言葉である。孤独を追い求める彼の姿、ひたすらに一人になりたいと思った時の心境と似ていると思うだろう。一人になった時、一人でいたい時に、彼の言葉はじんわりと響く。ほっとさせてくれるような言葉に、私もよく救われた。温かみをくれること、これもネガティブの美点と言えるだろう。

笑い、活力、理解、温かみ。ネガティブの美点はたくさんある。もし文を書く時などは、ネガティブの視点も取り入れるべきだと、私は思う。勿論、カフカのような視点だ。カフカは、人を傷つけることはしないのだ。

私はネガティブの良さを広められるだろうか。今の私の課題である。

『絶望名人カフカの人生論』　フランツ・カフカ著・頭木弘樹　編訳　新潮社

札幌市議会議長賞

その扉をたたく音を読んで

札幌光星高等学校　二年　野崎　幸子

「この人とは分かり合えない。」思わず口から出た。働かずとも親から毎月二〇万円の仕送りをしてもらっている二九歳、無職。数ヶ月で三〇歳になるからいつまでもこんな生活を続けられないと言いつつも、仕事をする気が無いと言い切ってしまう。一体、今の生活に何が文句があるのか。私は羨ましいどころかある種の妬みや嫌悪感さえも覚えた。正直なところ、宮路に対する印象は最悪だった。

私の父は、要介護四に該当する。私や母が手助けをしなければ日常生活は難しい。当然家の中は、手摺、昇降機等の介護用品で溢れている。介護が生活の中心である私としたら老人ホームには、近寄りたくない。耳が遠い人の相手をする大変さは分かっているし、正直、面倒くさいと思ってしまう。だからもう一度サックスを聞きたいとはいえ水木のおばあさんのもとに毎週通いお願いを聞き入れる宮路の姿が不思議だった。対称的な二人。当初、渡部君はどこか私に似ていると思った。余裕がある家庭に見せたいという理由で始めた吹奏楽。自分にも心あたりがある。中学校三年間やり続けた学級代表。行事の企画や運営など私の性に合っていたし、その中で委員長として仲間を引っ張っていくのにとてもやりがいを感じた。でも今思えば立候補をしたきっかけは、他の人にひけをとらないようにするためだった。父の介護は拘束される時間が多く、何よりも経済的負担が大きい。だから部活に入ることは諦めたけれども、その分周囲に置いていかれる感じがした。

授業参観の翌日に友達に言われる「おじいちゃん来るんだね。」、家族で出掛ける と タクシーの運転手さんに言われる「お孫さんとお出掛け、いいですね。」違う、お父さんなんだよと。口を開けば泣きそうになるから、その言葉はいつも飲み込んだままだった。車椅子を押す私を見る同級生の好奇の目。車椅子だから家族旅行が難しいと話すと憐れんだ目で見られること。同情されるのが嫌で自分を取り繕おうとするのに必死だった。

でも渡部君の「何一つあきらめていないし、不自由していない」という言葉にハッとした。私は環境のせいにしてどれだけのことから逃げてきたのだろう。人との関わりを減らして自分と向き合っているふりをして現実逃避をしているだけではないのか。もしかしたら私は渡部君ではなくて宮路なのかもしれない。なんとなく自分で答えが分かっているはずなのにそこから目を逸らしていることなんて私にも沢山あるはずだ。

水木のおばあさんからぼんくらと呼ばれ買い物を頼まれても口で言うほどでもなくそれに応えていく。相手のことを慮る彼の姿は育ちの良ささえ垣間見える。渡部君と兄弟のような友達になり、水木のおばあさんの家族に間違われていく宮路。そよかぜ荘に新たな風が吹いた。耳が遠い人と適切な距離と声の大きさで会話ができること。わざわざウクレレを買ってから教えようとする彼の責任感の強さ。最初は些細なきっかけから始めた事だったが次第に人の役に立つ事に意義を見出した姿は私の中学の頃と一緒ではないか。でも宮路も私もそのままでは駄目なのだ。必要とされることに対して喜びを感じているだけでは周りがいないと自分が確立出来ないことになる。自分が自分をまず認めてあげること。それが渡部君にあって、私と宮路に欠けていることだろう。

宮路はミュージシャンになるのが夢だったのではなく今、働けない理由をつけて自分を納得させていただけだった。音楽は、目的ではなく手段だった。過去の思い出にすがっていたかっただけだと思う。あの頃は良かったのにと。無邪気なぼんくらのふりはいつまでもしていられない。だから今が辛くても目を覚まして現実と対峙すべきだ。目を開けて現実を見つめ。前へと進む。石につまずくこともあるだろう。でも恐れていては進めない。

誰かに背中を押してもらうのを待っていた宮路。渡部君との出会い。彼のサックスが宮路の扉をたたいた。宮路のへたくそなギターと野太い声は水木のおばあさんの生きようとする心をよみがえらせた。人と人が関わることで生まれる音が日常には溢れかえっている。きっと誰の人生にも心の扉をたたく音が必ずあるだろう。大切なのは、それが特別な音ではない些細な日常の中にあることだと気づくことだ。音を聞こうとする自分になることだと思う。

私の扉をたたく音はどんな音だろうか。来年は受験生だ。先延ばしにしていた進路も真剣に向き合わなければ。理系を専攻しているが怠けていたこともあり小学生から得意としてきた数学で思うような点数が取れない。平静を装っているが追われている感が否めない。こんな時だからこそ、私も扉をたたく音を聞き逃さないように、そこから生まれる人のつながりは、欠くことができないのだから。

『その扉をたたく音』　瀬尾まいこ著　集英社

札幌市教育長賞

未来へのアクション

札幌市立簾舞小学校　四年　バーンアルバ優花

さわやかなレモンの香りとポコポコという泡の音が聞こえてきそう。カラフルなサンゴしょうの海を男の子と女の子が無重力で泳いでいる。この表紙を見た時、未来の海のイメージなのかなと思った。そして、早く読みたくなった。

七海は、小学六年生。夏休み、ハワイでピカケというヴェトナム人の女の子と友達になった。ピカケは、地球のかんきょう問題を絵で表現しているすごい子だ。七海も、考えるだけじゃなくて、そのためのアクションを起こすことをピカケと約束した。

ピカケの「サステナブル・ビーチ」という絵にかかれたクジラは、80 枚以上のプラスチックのふくろを飲みこんで死んでしまった。もしも、私がピカケのように絵をかくとしたら、どんな絵にしようか。うさぎやせみ、チューリップ達が泣いていて、そのなみだが雨になり、ごう雨やこう水などの自然さいがいを起こす、という絵でかんきょうの問題をみんなに伝えてみたい。

ハワイから帰った七海は、近くの川でゴミを拾い始めた。ゴミの入った大きなふくろを持っていたら、電車の中で人からジロジロ見られた。ハワイに行く前、七海はハーフだから見た目がちがうといわれて、もやもやしていた。目立ちたくないって、ずっと思っていたのに、ゴミ拾いなんて始めたら目立ってしまう。それなのに、その勇気はどこから来るんだろうと思った。でも、ハワイで、地球がかかえている大きな問題を知ったから、自分のなやみはくだらなく感じて、気にならなくなったのかもしれない。

ピカケと七海は、海をはさんで強いきずなでつながっている。私は、この本を読んで、「つながる」という言葉が、地球を守るキーワードだと思った。例えば、山にふった雨は、川を流れて海に着く。そして、雲になって雨となる、水循環。それに SDGs は、すべての目標がつながっているから、一つだけ達成しても意味がない。地球上のあらゆるものは、大きな地球という家に住む家族で、私もその一員だ。今、生きている私達が、未来のために何かつなげないと。

最初、私は地球のために役立つ事は、ごみ拾いくらいしか頭にうかばなかった。でも、いろいろな方法があることをこの本が教えてくれた。例えば、ピカケのように、絵をかいたり、歌や詩、SNS などで広めたり。学校で、勉強するのは未来のために役立つ事を考えたり、どんな事が起きているかを知るためだと思う。

私のクラスには、自分達がプロジェクトを考えて実行する活動がある。そこで、クラスのみんなに地球の問題を知らせる。それが、私の一つ目のアクション。それを知ったみんなと、自分達が出来る事やどうしたらよいのかを考えて発表して、動き出す。それが、二つ目のアクションだ。みんなが動き出したら、世界も動き出すから。そして、今、未来へのアクションを起こす時だ。

『サステナブル・ビーチ』　小手鞠　るい著　　さ・え・ら書房

札幌市学校図書館協議会会長賞

思いをかなえるために

札幌市立桑園小学校　六年　杉田　知優

私は、この本を読んで日本とのちがいにおどろいた。この本を書いたマララのすんでいた国パキスタンでは、タリバンと戦争をしていたり、女の子というだけで学校にかよえなかったりしていたからだ。マララは、「女の子にも教育を」と訴え続けて多くの人の共感を集めていた。でも、私が同じパキスタンに住んでいたらタリバンに殺されてしまうことをこわがって何もできないかもしれない。マララのように、声を上げたいと思っても上げられないかもしれないと思った。

私は、マララのタリバンに立ち向かう姿を尊敬した。また、なぜマララはタリバンのことをおそれず活動ができたのか、と思った。そして、マララが小さなときに見たごみの山で働く子どもたちが関係しているのではないかと考えた。この子どもたちは、ごみを買い取り業者に売ることでお金をかせいでいた。学校の経営者である父に、子どもたちを学校に通わせてあげたいとたのむも、たとえ無料で通えても家族の生活はさらに苦しくなってしまうから、とことわられてしまった。このような子どもたちにも学校で教育を受けさせてあげたいというマララの思いが、マララの原動力になったのでないかと思う。

十五歳のとき、タリバンに撃たれるも助かったマララは活動を続け、翌年には国連でスピーチを行った。私は、このスピーチの文を読んで感動した。マララの一言一言が身に染みたからだ。また、マララがタリバンに撃たれても活動できたのは、まらの「思い」が消えていなかったからではないか、と思った。

私もマララのように、「思い」があるのではないか、と思った。そして、私の将来の夢にたどりついた。私の将来の夢は薬剤師だ。私の母はアトピーを持っている。そんな母のような人を助けたいという思いがあるからだ。でも、思いをかなえるためには、マララのように努力や苦労がつくものだとも思った。私は算数が苦手だ。だから努力することが必要だし、そのほかの苦労や努力もあるかもしれない。だからこそ、マララが最強の武器と言った教育を生かしていきたいと思う。そして薬剤師になったときに、一人でも多くの人を助けてあげられるようになりたい。

マララのスピーチでのたった一言が、私の夢をかなえるための原動力になったと思う。

「自分の中にある無限の可能性を信じ、知識という武器を持ち、強くなってください。」

『わたしはマララ』　マララ・ユスフザイ著　学研

札幌市学校図書館協議会会長賞

医師になる覚悟

札幌市立信濃中学校　一年　坂本　温音

「コロナの治療、あなたにできるの？ちゃんと考えてる？」

悪気なくぶつけられた母の一言。この言葉は私に重くのしかかった。コロナウイルスの流行により、初めて感じた「医師」という夢への迷い。「できる。」と言うことは簡単だった。しかし、感染者や医療従事者への差別や偏見、隔離生活のニュースが頭をかすめ、自分にストップをかけた。そんな時に出会ったこの本は、人に寄り添う姿勢や生きる意味について考えさせてくれた一冊となった。

神谷美恵子は精神科医である。ハンセン病と呼ばれる癩に関する精神医学的研究を行った。ハンセン病は感染症で当時患者は差別され、隔離された。美恵子は若い頃愛する人と死別したり、結核やがんを患ったりした。とぼしい家計を補うため、語学教師の仕事もした。ハンセン病患者収容所「長島愛生園」で調査研究の後、医師として精いっぱい働いた。

美恵子は幼い頃から気丈に辛さや悲しみを人に見せまいと外ではにこにことふるまった。それは長島愛生園で勤めた時も変わらなかった。当直でも疲れを見せず、悩みをかかえる何人もの人々の対応をした。どんな話も否定せずに相手に寄り添い、相づちを打つ美恵子の顔はおだやかで、声は優しさに溢れていただろう。相手と真摯に向き合い、全てを包みこむような美恵子の姿に一体どれほどの人が励まされ、立ち直るころができただろうか。考えると胸が熱くなった。

現在、私達はコロナウイルスにより二年半余りのマスク生活を続けている。私は学校で友達に何かを頼んだり、さそったりする時相手が違う方向を向いていると不安になる。「良いと言っているけれど内心はどうなのだろう。無理していないだろうか。」などと必要以上に深く考え、その気持ちを引きずってしまう。せめてマスクがなければ…といつも思う。しかしこの世の中それはかなわない。相手を理解するには声だけでなく、表情やアイコンタクトが必要不可欠であることを痛感した。

美恵子が行ったハンセン病患者へのアンケート。回答の一つに「死をねがい肉体だけをもってきた」と書いた方がいた。「肉体」に精神は含まれない。つまり、絶望や悲しみすらをどこかに置き去りにして、死を待つばかりになっていたのだ。この状態は生きているといえるだろうかと私は疑問を持った。確かに心臓が動いていればその人は生きている。しかし、私は「生きる」という言葉にはそれだけではない、もっと深い意味を持っていると考えた。長島愛生園では芸術に力を注ぐ人、誰かのためになることに喜びを感じる人、退屈な日々の中でも生きる意味を見いだそうとする人など様々な人がいる。それぞれが生きがいを模索し懸命に生きている。私はこれこそが肉体、精神が共に「生きる」ということではないかと思う。何かに没頭すること、何かを考えること、感じること。その全てが当たり前ではなく、尊いことなのだと気づいた。

私の生きがいはなんだろう。真っ先に思い浮かんだのはピアノだ。ピアノを習い始めて七年目。人生の半分をピアノと共に生き、コンクールにも出場している。コンクールはどれだけ練習しても本番で良い演奏ができる保証はなく、納得のいく結果が出るとも限らない、とても厳しい世界だ。その中でも本番自分の全てを出し切り、曲を作り上げた時には、他では味わえない快感を手に入れられる。ピアノを続けていて良かった、と心の底から思える瞬間だ。愛生園の「青い鳥楽団」のメンバーは音符を読み取るというスタートラインに立つ努力から始まった。後遺症や障害がある中で工夫をこらし、音楽を楽しむ彼らに心を打たれた。私は、音楽とは演奏者の性格や考え方が率直に出るものだと思う。彼らが奏でる音楽は前向きで、きく人の心に大きな感動をもたらしただろう。

人は周囲に生きがいを与えられ、誰かに生きがいを与える。そのくり返しなのだということを学んだ。生きがいがないことに苦しむ人は、意外と身近にいるのかもしれない。そんな人達から相談を受けた時、話しかけられた時、大切にしなければならないことは何か。それは相手と、相手の話に集中し、目と耳をかたむけ、真正面から向き合うこと。自然にできるようになるまでは長い時間がかかりそうだ。しかし、普段から心がけていけば、今よりずっと信頼の深まった人間関係を作ることができるに違いない。

自己犠牲をはらい、他人の命や心を救う、医療従事者がいる。自分も感染するかもしれない、という恐怖をも顧みず、患者に接しているのだ。それに比べ、今までの自分はどうだっただろうか。怖がるだけ怖がって、現実から目を背けていた。逃げて迷っていた。美恵子が生きた時代と私達が生きる今は、あまり変わらないように感じる。私も命と心を救う人になる。強く覚悟を決めた。

私は医師になる。絶対に歩みを止めない。

『神谷美恵子　ハンセン病と歩んだ命の道程』　大谷　美和子著　　くもん出版

札幌市学校図書館協議会会長賞

本当の友だちとは

札幌光星高等学校　一年　白石　胡実

図書館に行ったときに目に止まり、興味をひくタイトルだったため手にとったことがこの本との出会いです。

小学四年生のとき、恵美は友だちとあいあい傘をしたことがきっかけで交通事故にあい左足の自由を奪われ松葉杖なしでは歩けない体になってしまいます。それを恵美は友だちのせいにし、多くの友だちまでも失ってしまいました。五年生になった恵美は腎臓が悪く病気がちな由香となわとびの持ち主をいっしょにやることになり親しくなっていきます。恵美は、うまく縄をまわせない由香に腹を立てて責めますがその翌朝、雨の中の登校を助けるために、由香が大人用の大きな傘をもって恵美を家まで迎えに来ます。そこから、恵美は由香との友情を深めていきます。「きみの友だち」は恵美を主人公として、そのまわりのクラスメイトや兄弟など八人の視点からストーリーが進んでいくお話です。

私はこの本を読むまでは、本当の友だちというのは、なんでも話せてよくいっしょに居る人のことだと思っていました。しかしこの本を読み、大きくではありませんが私の中での本当の友だちを意味が少し変わりました。「わたしは、一緒にいなくても寂しくない相手のこと、友だちって思うけど。」この言葉は由香がずっと学校を欠席しているときに、恵美が一人でいるのをみたクラスメイトが友だちが休んでいて寂しいか聞き、それに対して恵美が寂しくないとこたえて、冷たいと言われた後に言ったものです。私は元々、ずっといっしょにいる人が友だちだとは思ってはいませんでした。何人かでグループになり、常にいっしょにいるような人たちは、そうしていないと一人になってしまうから、嫌われてしまうからという思いがあって、ずっと他の人といっしょにいるという人がほとんどだと思っていました。仲の良い人がたくさんいるのではなく、一人の友だちがいれば良いと思っていました。そういう考え方は、私と恵美は似ていると思います。しかし、私は最初一緒にいなくても寂しくはないのが友だちだという考えに全面的に賛成して良いのかわかりませんでした。たしかに、ずっと一緒にいる必要はありませんし、それが友だちだとは思いません。ですが、長期休暇で全く会わない期間があれば多少は寂しくなるものだと思っていました。

そこで、私は友だちとは何なのか改めて考えてみることにしました。友だちがつらい時や苦しい時に相手のことを思って、その苦しみやつらさをわかち合う、自分よりも相手を思うそんな友だちが本当の友だちだと思います。そして、その前提として、ありのままの自分、等身大の自分でいることがあると思います。恵美にはそういう、そのままの自分でいる強さがあったから友だちといっしょにいなくても寂しくないと思えたのではないでしょうか。また、恵美は一人友だちがいれば良いと言っていますが私は友だちが二人、三人いても良いと思っています。何十人も本当の友だちがいるという事はないと思いますが一人でなければいけないということでもないと思います。同じように大切に思っているのならば、その人たちのことを友だちと言っても良いはずです。「わたしは『みんな』って嫌いだから。『みんな』が『みんな』でいるうちは、友だちじゃない、絶対に」と恵美が言っているように、「みんな」とまとめてしまうのではなく。一対一で一人の人間としてつきあっていくことができるのならば、友だちが複数人いても良いのではないかと思いました。

私は「きみの友だち」を読み、友だちとは何か、友だちとの距離感、接し方など、自分は普段どう行動しているのか考えさせられました。本の中に色々な視点での物語があったように、友だちとの関わり方もぞれぞれだと思います。恵美と由香のような関係が一番だということもないはずです。ただ、普段あたりまえのようにいる友だちの存在はとても大切なもので、友だちといるときの自分のあり方や友だちとはなんなのか、考え続けたいと思いました。

私は今まで、友だちについて考えるときには人間関係や相手と自分の二人のことを考えていましたが、それだけでなく自分自身の事も考える必要があるのだということに気がつきました。相手との関係の前に、自分がそのままの自分でいること。そして、一人でいるということを決しておそれないこと。私も恵美のように、そういう強さをもちたいと思いました。

この本は私にとって、友だちと、そして自分自身と向き合うきっかけを与えてくれました。私はこれから友だちとけんかをすることも意見がすれちがうこともあると思います。友だちとは何か、答えがないからこそ悩むことがあると思います。それでも私はいつでも友だちに寄りそえる友だちになりたいです。

『きみの友だち』　重松清著　新潮社

札幌市ＰＴＡ協議会会長賞

「かしたつもり×もらったつもり」をよんで

札幌市立新川中央小学校　一年　山田　朝陽

ぼくには、おねえちゃんがふたりいます。しょうがっこう六ねんせいと三ねんせいのおねえちゃんです。おねえちゃんたちは、なかがいいときもあるけれど、よくけんかをしています。

このほんにでてくるれんとだいちもけんかをします。れんはかしたつもりのものが、だいちにとってはもらったつもりだったからです。

ぼくのおねえちゃんたちも、ものをかえせとか、あしがぶつかったとか、ぼくのとなりにすわるのはどっちとか、そういうことでけんかをしています。ぼくはそれをきいて、ふたりともあんまりあたまがよくないなあとおもいます。ふたりでなかよくあそべばいいのになあとおもっています。

おねえちゃんたちがけんかをすると、おかあさんはやめなさいとおこっています。ふたりからはなしをきいているけれど、おねえちゃんたちは、あなたがわるい、わたしはわるくないというので、おかあさんはこまっています。ぼくはほんとうはどっちがわるいかしっています。

ほんのなかのふたりは、どちらがわるいわけでもありません。こうじのおとがけんかのげんいんでした。おとのせいでだいじな「かして」がきこえなかったから、もらったつもりになってしまったのです。

ぼくのおねえちゃんたちも、すぐおこらなければいいし、こまったらおかあさんにそうだんすればいいし、いやなことがあったらちゃんといえばいいとおもいます。おねえちゃんたちは、ぼくのことがかわいいからゆるしちゃうとよくいいます。おねえちゃんたちもすこしだけゆるしたら、なかよくできるのになとおもいます。ぼくはやさしいおねえちゃんたちが、だいすきです。なかよくしてくれたら、もっとすきです。

『かしたつもり×もらったつもり』かさいまり　作・　北村悠花　え　くもん出版

札幌市ＰＴＡ協議会会長賞

兎の眼に映るタカラモノ

札幌市立向陵中学校　二年　岩永　千結子

「ああいう子にこそタカラモノはいっぱいつまっているもんだ。」

様々な価値観、考え方をもつ人々で私たちの社会は成り立っている。そして一人ひとりが、何か大事なものを持っている。

自分にとって居心地の良い環境とは何かと問われたら、価値観を共有できる仲間といることだと答えるだろう。しかし自分とは全く異なる考えだとしても、人はそれぞれ大切なタカラモノをもっている。むしろ人から避けられ、理解されないような人にその「宝」はたくさんつまっているとしたら――。

この物語は昭和三十年代の日本の塵芥処理所、いわゆるゴミ処理場で働く人々の子供が通う小学校の話である。大学を出たばかりの新任教師、小谷笑美先生は医者の娘として何不自由なく育ってきた。自分と子供たちの育ってきた環境の違いから、はじめは彼らに自分の価値観のものさしを押しつけてしまう。

しかし子供たちの立場から考えようとしたり、全てを受け入れ正面から向き合おうとしたりして、しだいに距離を縮めていく。

小谷先生が違いをタカラモノとして受け入れはじめた頃、彼女の先輩教師である足立先生にこう宣言するシーンがある。

「まねはしません。苦しんでも自分で考えて、自分でつくりだすようにします」

まねをしないというのは案外難しい。一から自分らしさを構築するのは時間も手間もかかる。一方、誰かが既に実行したことを繰り返すのは、何も考える必要がなく易しい。

熟考し、自ら新しいものを創造することには必ず苦しみが伴う。生みの苦しみだ。しかし小谷先生の言葉を借りれば、「苦労は頭を上等にする」らしい。苦労というものはいいものだと教え子にアドバイスしていたように簡単に答えが出ない方が考え抜く力がついたりひらめきが生まれたりする。その結果、最初は考えもしなかった道に辿りつくかもしれない。苦労してひとつの試練を乗り越えたとき、そこにはきっと人間的成長があるはずだ。

自分との違いを認め、受け入れ、時に賞賛するというのはさらに難しい。もしも誰もがそれを簡単にできたのなら、この世に争い事など起きないはずである。

「いまの人はみんな人間の命を食べて生きている。戦争で死んだ人の命をたべて生きている。戦争に反対して殺された人の命をたべて生きている。平気で命を食べている人がいる。苦しそうに命をたべている人もいる」

この足立先生の言葉から、ポーランドにあるアウシュヴィッツ強制収容所を訪れたときのことを思い出した。収容者の膨大な数の靴や毛髪、あちこちにはりめぐらされた有刺鉄線、大量虐殺に使われたガス室。それらはほとんど当時のままの状態で保存されていた。かつての痛々しい悲劇が「事実」として目の前に迫り、底知れぬ恐怖を感じた。

「ＡＲＢＥＩＴ　ＭＡＣＨＴ　ＦＲＥＩ」

――働けば自由になる

この文字が掲げられた門を、人々はどんな思いでくぐったのだろう

他者との考えの違いを受け入れられず、それを排除しようとする感情が暴走すると、戦争や差別は容易に起こってしまう。民族や人種で優劣をつけ、自分のもつものを善、違うものを悪とみなす、この考えが、残酷な迫害の歴史に人類を導いてしまった。足立先生の言葉はかつての戦争のことを指しているが、現在実際に世界で起こっている争いのことをも表しているように思えてならない。

いつの時代においても、人間は簡単に人間を傷つけることができてしまうのである。

収容所入口にある門の「B」の文字は上下が反対になっている。収容者が作ったこの文字は、せめてもの抵抗の証だったとも言われている。

――人間は抵抗。つまりレジスタンスが大切ですよ、みなさん。人間が美しくあるために抵抗の精神をわすれてはなりません

この小谷先生の恩師の言葉はまさに極限の中でさえ美しく、懸命に生きようとする人々の抵抗を言い表している。抵抗とは勇気のいることだ。それは真の強さの象徴なのである。

タイトルの兎の眼とは、小谷先生が頻繁に通っていた寺にある善財童子という彫像の眼のことだ。いのりをこめたように、ものを思うかのように、静かな光をたたえるやさしい眼は人ではなく「兎」の眼と表現されている。全てを受け入れ、包みこむような優しさを全身から醸し出しているからこそ、無垢な透き通る美しさがその眼にはあったのだ。

今までの自分は価値観が違えば受け入れることなく避ける傾向にあった。しかし違いに目をそむけるのではなく、そこにつまったタカラモノを知るためにあえて飛び込むことも大切だと思うようになった。そしてそのはるか先に、兎の眼は存在するのではないか。その透き通った眼で物事を見ることができるように、少しずつ人として成長していきたい

『兎の眼』　灰谷　健次郎著　新潮社

札幌市ＰＴＡ協議会会長賞

「夜と霧」を読んで

札幌聖心女子学院高等学校　三年　目良　茉莉香

「心理学者、強制収容所を体験する。」

飾りのない原題がいきなり私の目に飛び込んできた。静かなタイトル「夜と霧」と表紙絵の「一一九一〇四」は、何を意味しているのだろう。

昨今、戦争、コロナ禍、自然災害と先行きが不透明で生きづらさを感じる日常が続く中にあって、私は受験勉強に追われていた。時間の流れがとても早く、日々何かを選択することを強いられているようで、自問自答しながらも正しい答えを見出せぬまま、何か分からないものに縛られ、心が押し潰されそうになっていた。夏休みにこの本に出会い、著者ヴィクトール・Ｅ・フランクルは、意外な答えで私を導いてくれた。

時は一九三三年、ナチスドイツ。ユダヤ人というだけで多くの人が捕らえられた強制収容所でフランクルは被収容者として強制労働を生身で体験する。そしてフランクルは強制収容所を経験した人間の極限状態における心理について、何を支えとし、心はどのように変化していたのか、心理学者として分析をする。毎日僅かな食事で、過酷な強制労働をさせられ、理不尽な虐待を受け、病気になればガス室に送られる恐怖に怯えながら、そんな日々がいつ果てることもなく続き、その中でどうして人間性を保つことが出来ようか。

「夜と霧」とは、ヒトラーによって発せられた作戦名である。自分に敵対する者を捕まえる時、まるで夜の霧の中に消えるように、ひっそりと跡形も無く連行されることだった。そして「一一九一〇四」はフランクルの名の代わりの被収容者番号だった。収容所の中で人間はただの数字となり、「無感動」「無感覚」「無関心」の状態が蔓延する。ナチスだけでなく、同じユダヤ人同士であっても天使にも悪魔にもなることを知る。人間らしい心が麻痺したためであろう。

胸が締め付けられるような重苦しい過酷な体験は、文字を読み進めれば進めるほど、気怠く重石のように私にのしかかり、毒が体に回っていくようだった。

アウシュビッツは人間が作り出した地獄だ。人間は、これだけ残酷で愚かなのかと、あまりの凄惨さに震えが走った。

一九四四年から一九四五年のクリスマスから新年にかけて大量の死者が出る。何故大量の死者が出たのか、その原因は過酷な労働や悪化した栄養、伝染病等の説明のつくものではなかった。人々は、「クリスマスには帰れるだろう」と素朴な希望に身を寄せ、それが叶わないと分かった時、どんどん失望し、落胆し、抵抗力を落としていったのだ。内側にある心の抵抗力を落とすことは、命を落とすことなのだ。

強制収容所で生き残るには、どんな些細なことでも希望を失わないことが重要だったのである。そしてフランクルは、人生の目的意識が大切で、全てを失っても「希望」を持って生きることを強く伝えている。生きている意味は、達成されることが必須ではなく、達成しようと努力することに意義がある。思考を一八〇度転換せよ、未来の目的を見つめ、人生が自分を待っている、誰かが自分を待っている、と思うことが重要だと強い解答を提示した。

それからフランクルは、二年七ヶ月の間に四つの収容所を体験し、終戦を迎え奇跡的に生還し解放される。愛する家族との再会を夢見てウィーンに帰るが、皆収容所で死亡していることを知る。過酷で悲惨な状況の中でもこのような理不尽な悲劇を風化させまいと、経験者としての使命を果たしたいというフランクルの底知れない精神の強さでこの本をわずか九日間で書きあげた。同じ苦しみを抱える人々に、どんな絶望的な状況であっても必ず希望の光があるということを証明したのだ。

この本を読み終えた時、フランクルの陰には数万もの死があると思うと、平和の大切さや、戦争で失って良い命などひとつもないということと、自分の環境と照らし合わせると雲泥の差で、自分がどれだけ幸せに恵まれているのかを痛感し、感謝をしなければならないと強く思った。湧き上がるこの複雑な感情で胸が熱くなった。また、この著書を通して自分の内面を見ることをやめ、自分を待っている何かに目を向けるという、思考の方向を一八〇度切り替える事により、人生の在り方も変わってくるという事を学ぶ事ができた。辛い事も耐え得る力が湧き、フランクルは私に大切な事を気付かせてくれた。

私は自分の未来に向かって、人生からの問いを引き受けて、それに責任をもって答え続け、人生を切り開いていきたいと思う。そしてもしも、自分の道が分からなくなった時はこの本をそっと開いてみようと思う。

フランクルの優しいメッセージが私の道を照らしてくれるに違いない。

『夜と霧』　ヴィクトール・Ｅ・フランクル著　池田香代子訳　みすず書房

北海道高等学校ＰＴＡ連合会石狩支部長賞

まだまだプロローグ

札幌光星高等学校　二年　櫻井　麻央

「もし自分があの人と入れ替わったらどんな人生をおくれるのだろう。」と誰しもが考えたことがあるのではないだろうか。少なくとも私は幼い頃、漠然とポッキーさんに憧れていた。この本を読んだ事で当時の私の感情を理解できたような気がする。

まず始めに、ポッキーさんは魔法の箱（パソコン）を買うために小学二年生から中学生まで何十万円も貯金をしていたという。何かを競っていたわけでは無いが、この時点で私に勝ち目は無い。私はお年玉をもらった直後以外の日常生活で二万円以上貯金できた事が無いからである。家族のお手伝いをしてお金をもらうというのは何度か経験があるが、当時の小学生の自分にとっては本当に辛い事だった。自分の好きな事に対してだから努力できるんじゃあないかという考えもあると思うが、私にはとにかく物欲が無かった。だから貯金ができないのかと今ではもう諦めている。

私には「負けず嫌いの人は成功する」という自論がある。勉強面では特にその事が言えると思う。他人に負けたくないという強い意志があればどこまでも上に行けるだろうというのが個人的な見解だ。実際にポッキーさんがその負けず嫌いの例である。

「ライバル認定した相手がやっていることを気にしすぎたり、自分が動画投稿を休むことが怖くなってしまったり、というデメリットがある。」

本書ではこのように述べられている。だがしかし、負けず嫌いではない私からすると全くもって悪い事とではない。そもそも誰かをライバル認定できるだけでもすごいと思う。それは多分、自分との類似点を見つけたり尊敬できる点があったりしたのだろう。本当に立派だ。学校では模試などの結果が掲示されたりするが、自分と点数が近い人が知りあいだとしても悔しいという感情はあまり抱かないし、それよりも点数の高い人の名前を見て、この人はいつも名前を見るけどどんな人なんだろう。話してみたいな。などと考えた方が自分にとっては楽しい事で有意義な時間なのだ。しかし。目標を誰かに設定する事で向上心が高まるというのはとても頷ける。私は高校に入ってからそれを実感した。だからこそ私はポッキーさんの「負けず嫌い」が、辛い時間は多いと思うが羨ましい。

また、本書ではポッキーさんがチャンネル登録者数百万人を突破した時について次のように述べられている。

「やりきったという達成感を得たことで僕のモチベーションは空気の抜けた風船のように急速にしぼんでしまった。次の目標を見失って、僕はどうすればいいのだろう？そんな問いが頭に浮かんでも、答えなんて出なかった。」

私はこの点について、とても気になっていた。ポッキーさんが述べた通り、目標に到達してしまうと次に何をすべきか分からない。一つの目標に対して大きな熱量を込めていればより喪失感を感じるであろう。私も高校入学から夏休みが終わるまでの記憶が一切無い。ぎりぎり記憶しているものといえば文化祭だけ。それ以外家や学校では何をしていたのだろう。ただぼーっとしていたのだろうか。当時は気付かなかったが、あれを一般に「燃え尽き症候群」と呼ぶのだと今では分かる。実際私は二年生になった今でも危ない所がある。もうすぐ大学受験という大きな壁があるが、私はそれを上手く乗り越えられるだろうか。不安しか無いが、ポッキーさんはその不安や苦しみを乗り越えてきたのだ。若いうちに上京して大人ばかりの見知らぬ土地で過ごすだなんて想像しただけで身震いがする。大学入学の為などとは違うのだ。成功する根拠も明確ではない仕事をしに行くのだから、相当な決断をしたのだろうと思う。

高校生というのは、将来の展望が際限無く広がっているものであろう。通っている高校や今の自分自身のレベルによって限られてくる事はあるかもしれないが、大半は高校生から目指す事が可能である。そこでポッキーさんは三重にいたからゲーム実況者を志したのだと述べている。私は自分が育った環境も将来の夢に影響してくるのだとハッとした。環境が違えば自分と比較する対象だって変わってくる。その中でポッキーさんは今の自分では駄目だと痛感したのだろう。決断力も行動力も併せ持っているという点が今のポッキーさんの登録者数や仕事の創意工夫に直結しているのではないだろうか。

東大生や有名企業の社長などは半端ないオーラを放っていると個人的には感じる。あの人は多分何か大きな責任を持っているのではなかろうかと。だがポッキーさんはどうだろう。傍から見れば普通の人に見えはしないか。私が思うに彼は一般人の皮をかぶった異才なのだ。見かけには「あえて」表さない。そんな才能も持っているのだ。これらの要因に基づき、私は、ポッキーさんの動画投稿者としての在り方に尊敬の念を抱かざるを得ない。

『エンディングにはまだはやい』　ポッキー著　ＫＡＤＯＫＡＷＡ

光陽社賞

ため息からの再出発

田中学園立命館慶祥小学校　四年　水柿　蓮太朗

最後のページを読み終えた時、ぼくはフーっと大きなため息をつきました。数分前までは、ため息こぞうの台詞にアハハと笑っていたのに、本を閉じた時には心がチクチクとなりました。一気に読んだので、疲れたのかもしれないと思いましたが、愛読書の探偵小説は何時間読んでも疲れません。

巻末のため息の分類を見直すと、ぼくのため息はストレス系に分類されるような気がしました。小雪が、たむちんを困らせている様子がとても気になりました。小雪と性格的に少し似ているぼくも、今まで友達を困らせたことがあるのかもしれません。

四年生になってから、学校ではグループ活動をすることが増えました。宿泊学習の準備でも、グループに分かれて、しおりの作成やルール決めをしました。ぼくは、自分の意見が正しいと思うと、小雪のように泣きはしませんが、強く主張してしまうことがあります。たむちんは、友達やお母さんからアドバイスをもらい、グループのみんなが納得する方法を探し続けました。冷静に自分の意見を伝えながら友達の考えを聞くという技を、残念ながら、ぼくは上手に使えません。

人の行動には、それぞれ事情があることにも気が付きました。最初イジワルそうに思えた小雪は、実際のところ加世堂さんを誰よりも心配していました。小雪が、やる気のなくなった加世堂さんに腹を立ててしまったことは、ぼくには十分理解できました。ぼくも同じように考えるからです。お母さんに何もかも否定され続けた加世堂さんが、保健室登校になってしまったことも理解できました。なぜならぼくも、勉強で上位にならなければいけないプレッシャーから、時々どこかに逃げ出したくなるからです。頑張り続けるのは、簡単ではありません。加世堂さんのお母さんは、加世堂さんのことを想って注意しているのだと思います。ぼくの母も同じです。ぼくたちは、みんな違った事情があり、みんな違う考え方をしています。そのため、正しいという判断は、それぞれ違ってきます。友達二人が衝突した時、どちらにも言い分があり、どちらの考えも正しくて大事なのです。

たむちん達の気持ちが一つになって、最終的には良い作品ができあがったように、ぼくも思いやりとゆずる気持ちを持てば、グループ活動をもっとスムーズに進めることができるかもしれないと思いました。自分で解決できなくなったら、友達や家族に助けてもらって、新しい観点から考えれば良いのです。いつも一人で突っ走っているぼくですが、これからは、友達のペースに合わせて歩いてみます。何かに失敗したら、ため息をたくさんついて、また笑顔で再出発しようと思えるようになりました。

『みんなのためいき図鑑』　村上しいこ作　　株式会社童心社

キハラ賞

平等に生きるということ

藤女子中学校　一年　江口　陽加李

少し私はのんびりと生きすぎているのかもしれないと、この本を読み終えて思った。困っている人たちを助けることは、とても良いことだし、素敵なことだ。しかし、法律のせいで、その素敵な行動が罪になることを知った。

奴隷制度や人種差別がアメリカであったのは、今から一七〇年程前のことだ。このような話題に触れることは私の日常生活ではほぼなかった。だから、この本を見つけたとき、私はとても興味をひかれた。

ある夜、白人の少女アマンダの前に、黒人の家族が現れた。カナダを目指して逃げている途中の逃亡奴隷だった。アマンダは奴隷など見たこともなかった。なぜ黒人の家族が現れたのだろう。それは、アマンダの両親の職業に関係している。アマンダの両親は、「地下鉄道」の「駅長」だった。「地下鉄道」とは、当時、実際に存在した、逃亡奴隷を自由の道へ逃す秘密組織のことで、一八一〇年から一八五〇年のあいだに十万人にものぼる逃亡奴隷を逃すことに成功したといわれている。そして、アマンダの両親の職業でもある「駅長」は旅の途中でかくまって休む場所を提供し、「車掌」は次の「駅」まで送りとどける仕事をしていた。そのため、アマンダの家に黒人の家族が現れたのだ。逃亡奴隷となるのが命がけのことだけなく、「地下鉄道」にかかわることも、たいへんな重罰をともなう法律違反だった。そんな危険をかえりみず、アマンダの両親やアマンダは協力して黒人の家族を逃がすことに成功したのだ。この三人は英雄といえるだろう。もしも私がアマンダの立場だったら、黒人の家族のことを守り、逃がすという勇気ある行動は出来なかったと思う。しかし、アマンダは行動を起こすことが出来た。それは、アマンダには、ある理由があったからだ。

アマンダが行動を起こすことが出来た理由は、二つあると思う。一つ目は、友人や友人の家族を思いやる気持ちだ。黒人の家族の一人にハンナという名のアマンダと同じ年頃の女の子がいた。アマンダとハンナは、会話を重ねるうちに仲良くなっていった。そんなハンナとハンナの家族のために何か出来ることはないかと考えたから、行動を起こすことが出来たのだと思う。二つ目は、アマンダ自身のためにだ。以前、アマンダはハンナを危険な目にあわせてしまったのだ。それによって両親から信用されなくなっていった。その信頼回復にとった行動とも考えられる。この二つの理由であるならば、アマンダがなぜ危険をかえりみずに勇気ある行動をとれたのかが、理解できる。

ハンナたち黒人の家族からすれば、自分たちがカナダへ逃げるのを邪魔する警察は厄介だ。しかし、警察の立場で考えると、なぜ逃亡奴隷を必死になって捕まえようとするのかが分かる。それが仕事だからだ。逃亡奴隷を捕まえることが出来たら、お金がもらえる。そのお金があれば自分で食べる物を買ったり、興味に使ったりなど好きなことに使える。このように考えると、ハンナたち黒人の家族のような逃亡奴隷の立場と警察の立場が反対になったとしても、同じことが起こるだろう。だからと言って、この現状を絶対にくり返してはいけない。肌の色や目の色に違いがあるとしても、国の文化が異なっているとしても、お互いを理解し、高め合うことが何よりも一番大切なのである。決して国と国の問題や国のなかでの問題を戦争で解決してはいけない。そこには、平等や平和といった言葉が一切ないのだ。誰もが自由に学び、国境を越えて自由に他国に住んでいる人とコミュニケーションをとる。それこそが、私が考える平等で平和な世界だ。

この本を読み終えた私は、『秘密の道をぬけて』というタイトルをもう一度見た。ここでいう秘密の道というのは、「何かのゴールに向けて」というような変換の仕方も出来ると思う。そう考えると、勉強やスポーツ、楽器演奏、合唱などにもつながる。目標に向かって一生懸命に努力することは、全てそうだ。そして、自分はいつも「普通」に生きようとしている。「みんながこれにするならば、私もこれにしよう」「みんながこれを好きというならば、私もこれを好きになろう」など、周りと同じであることが私の「当たり前」であり、「普通」だった。しかし、この世界には肌の色や声、性格、顔が全く同じなんて誰一人いないのだと、この本を読んで深く考えるようになった。声や性格が違うからこそ、お互いの足りないところを補い、仲良くなれる仲間がいるはずだ。その仲間と一生付き合う可能性もある。だから、私はこれからの人生を自分らしく堂々と歩いてく。

『平等に生きるということ』　ロニー・ショッター著　あすなろ書房

教育出版賞

色々な色の中のぼく

札幌市立南月寒小学校　六年　河口　留偉

夜に出現する蛾はみんなの嫌われ者だ。嫌われる理由は、パタパタという羽音を出すことや、蛾の幼虫が毛虫であることだ。毛虫は動き方が気持ち悪く、さらに、虫は、触れると触れた場所がかゆくなってしまうので、そこも嫌われポイントだと想う、そう考えてみると蛾はぼくと似てるかもしれない。ぼくもうるさくしたら、「うるさい！」とよく言われる。変な動き方をして「気持ち悪い」とも言われる。さらに、人が嫌がっていることを分かっているのに楽しくなると、自分が止められなくなる。ぼくが嫌われ者か。ちょっと嫌な気持ちだ。しかし、その嫌われ者の蛾が希望と進化と生き延びることをぼくに教えてくれた。

この蛾は「シモフリガ」という種類で、もともとは黒と白がまざった模様の蛾だ。ときどき真っ黒い蛾真っ白い蛾が生まれ、白い場所だと白い蛾は生き延び、黒い蛾が食べられる。黒い場所だと、白い蛾が食べられる。色と生活する場所によって生き残るか死ぬかが分かれる、そして、ぼくは学校にいると、自分はみんなとはちがう色をしているなあと思う時がある。テストをしている時にねむってしまったり、頭の中に考え事が浮かびすぎて勉強をやめてしまったりすることもある。

うまく隠れて卵を産み、卵を守るシモフリ蛾に感動した、どんな生き物でも子を守るのです。熊は人をおそいますが、親が子を必死に守るからです。鳥は獲物を見つけだし、子に食べさせます、このように、生き物は子を守っているのです、ぼくも両親に守られています、ぼくが行きたい中学校に行けるようにサポートしてくれている、オープンスクールに通わせてくれたり、学費が払えるようにたくさん働いたり、がんばってくれている。

蛾がどんどん子孫たちに世代をつなげていくのが感動した、子孫たちに生きてほしいからだと思う。ぼくも、ぼくが通いたい中学に入学できたら、オープンスクールに来た子に「こうなんだよ」って情報を伝えたい。この本には「変化と適応の生き延びることと希望のお話です」と書いてあった、ぼくに似ている蛾は変化して適応しているが、ぼくはうまくやれる自身は半々だ、でも、ぼくが行きたいと思っている中学には、ぼくを励ましてくれている。「人を認める」「人を排除しない」「仲間を作る」。

その中学は新札幌にある私立中学校で、電車通学になるのが不安だ、小学校の同級生とはお別れになるのも心配だが、「友達と別れたって気にするな」と思いながら進んでいる、そして楽しみなことはいろんな授業が学べることだ。たとえば、さいころを使った勉強やタブレットを使った勉強ができる、ぼくにあったことができることが私立中学の楽しみなポイントだ、だから入学試験に合格できるように国語や算数の勉強をがんばりたい、ぼくの色がかがやく未来が楽しみだ。

『蛾　姿はかわる』　イザベル・トーマス著　化学同人

北海教育評論社賞

表情は言葉

市立札幌啓北商業高等学校　一年　懸谷　一花

「笑顔」が今日も誰かを傷つける。この帯紙に書かれている「笑顔」の意味が深く気になった。中学生の頃に言われた「本当に楽しい？」と聞かれた言葉、「大丈夫」と言い続ける凛子が重なってしまっていた。

一人でいることが好きな凛子は、小さい頃から自分の意志を大切にして過ごしていた。いじめられているわけでも、クラスの人が嫌いなわけでもないが担任の先生や家族に心配されてしまう。自分の好きなように過ごしているのに、周りと違いが出てしまうことで変わってしまった日常。巻き込んでしまった家族。次の学校では友達を作らなければいけないというプレッシャーをもって凛子は一歩を踏み出す。転入すると周りは興味をもって近寄ってくる。自分もその中の一人になるだろう。前の学校、誕生日、好きな物、沢山の質問をして満足すると人は自然と消えていく。そんな中凛子には、気になる相手がいた。学校へ行く前の日、海で出会った同級生の将暉だ。目立つ髪色の彼に凛子はキツい当たり方をしてしまっていた。そんな彼と凛子が同じクラスになった時の凛子の表情はとても想像しにくいものなのだろう。凛子にとって今回は失敗してはいけない生活だ。だからこそ凛子は、笑顔を貼り付けて会話をしただろう。この正反対の二人は、どうなっていくのだろう。この時の私は想像のできない彼の内側の心を知ることになる。

「凛子も別に気を遣わなくていいから。」この一言は凛子にドキリと緊張感を与えたのだろう。前にいる四人の友だちのじゃれあいに疑問をもっていた時に不意に言われた一言だった。友だちを知らない凛子には、どう回答するのか正解が分からず曖昧に笑ってしまっていた。自分だったら正義感というものをふりまいてかばうのか、皆で冗談だと笑うのか、教室で息をすることの息苦しさを改めて感じた場面だった。

凛子も周りの皆も、内心では怯える気持ちがあるのだろうと思った。でも実際に、空気を良くするために冗談と、はりつけた笑顔をするのは必要なことでもあった。生きる上で欠かせないものだと思う。でもそれが、実に自分自身を弱くさせ、逆に悪い方向へと進んでいくことに気付いたのは、この本の凛子と将暉の会話だった。誰かが誰かと共に居たいと思う気持ち、寂しさを紛らわそうと頼る気持ち、ひとりでいることが許されないと思う気持ち、一つ一つが自分達をつくってくれているのだと感じた。だからこそ凛子は、田舎だからと言い訳せず、現実に目を向けれたのだと思う。だからこそ将暉は、笑顔でヘラヘラする自分に対して疑問をもち、凛子にだけでも自分の弱音を言えたのだろう。ひとりが許されないわけではなく、「みんな、ひとりなんだ。」と気付かされた。

本を読み終えた時、今までの自分の弱さ、逃げを思い知った。自分は凛子の様に、向き合おうとせず、将暉の様に考えるのではなくとりあえずの表情をしていた。だからこそ、他の人に指摘された時に、図星でいた自分がいた。だからこそ、罪悪感もあった。「本当に楽しい？」を言われたあの日、自分が目の前にいる友だちと何気ない会話をして、何気ない日常を話して、相手がどう考えているかも知らず、友だちを優先して動いていた。いや、友だちのことを考えて動く「何か」になっていた。目の前にいた友だちはどう思ったのだろう。表情をつくり、きげんを伺い、行動する自分の姿に何がいいたかったのか。

きっと、悲しんだだろう。だからその顔は知らない間に、二人して距離を作ってしまったのだろう。卒業する前に縮まることのなくどんどん離れていく距離を。

自分は、いや私は後悔ばかりの道をたどってしまっている。いつから私自身を、私が見失ってしまったのだろう。凛子達の成長が私にはまぶしく輝いて見える。

表情には、周りを動かす「力」がある。「言葉」のようにウソをぬることも、本音を伝えることができる。

コロナ禍でマスクを装着している今は、私の過去の様に、ウソで上辺をぬることができるチャンスなのかもしれない。同時にその行動は、自分を見失い、周りにつらく、悲しい思いをさせてしまうものになってしまうこともある。

私は、凛子や将暉、周りの友人のように、自分の弱さや心に向き合っていきたい。当たり前のことのようで深く考えさせられる、向き合う力をつけたい。周りが壁をつくっているのではなく、自分が壁をつくって過ごしていることに気付けたのなら、後悔してしまった出来事をぬりかえたい。そしてもう一度、あの日と違った表情で、友達と笑い合い、心の底から笑い合える日をつくりたい。

「あした」も続いていく日々に。共に過ごすことのできる「今」を大切に。

『世界は「　」で沈んでいく』　櫻いいよ著　ＰＨＰカラフルノベル

図書館ネットワークサービス賞

数学でりょうりを見ると

札幌市立厚別北小学校　二年　佐々木　英俊

この女の子とぼくは気があわなそうだな。ひょうしの、「すうがく」でにこにこしている女の子を見て、そう思いました。ぼくには中学生のお姉ちゃんがいます。お姉ちゃんは、いつもむずかしそうな数学の計算をしています。中学生は数学を勉強するのかぁ。ずっと小学生だといいなと思っていました。

本には「数学ノート」があって、数学のことが分かりやすく書いてあります。自分のすきなことをあつめたノートがおもしろくて、ぼくも作ってみました。ぼくが今すきなことはりょうりです。たくさんの人にぼくのりょうりを食べてよろこんでもらうのが夢です。メニューをふやしたくて、大すきなもちを作ることにしました。本当は、もち米をたいてつぶして、うすときねでついて作ります。でも、ぼくの家にはうすときねがないので、水ともち米をミキサーに入れて牛にゅうみたいにとろとろにして、フライパンでやきました。あたためながらヘラでまぜると、だんだんとうめいになっておもちができました。「モチモチもち」という名前をつけました。

りょうりをすると、女の子がノートにかいた数学がたくさん出てきます。もち米は「集合」。フライパンに白いとろとろを入れたときにしずくがおちると「同心円」ができたし、ヘラでまぜると、あとがすうっとのこって「軌道」が見えました。丸めたもちは「球」。いやだなと思っていたものが、ぼくのすきなものの中にかくれていました。みんなすきなことはちがうけれど、同じせかいでつながっているのです。ほかの人のすきを知ったら、ぼくのすきがもっとおもしろく見えてきて、数学が少しだけ楽しみになりました。

数学ノートには「自分のいちばんすきなことをやって夢をかなえた人たちへ」と書いてありました。女の子は本の中からぼくのすきなことをおうえんしてくれているのです。

ぼくが中学生になったら、君のすきな数学をもっといっしょに楽しみたいな。

『すうがくでせかいをみるの』　ミゲル・タンコ著　ほるぷ出版

図書館ネットワーク賞

つぐみから学んだこと

藤女子中学校　一年　田中　結衣

私が、『TUGUMI』を読んで一番印象深く残っていることは、つぐみのひねくれた性格だ。他の人とは違う考えを持っているつぐみだからこそ、私は人と人との関係性や価値観の違いを客観的に見て相手のことを考えられるようになったのだと思う。

小学生の頃に私と同じクラスに意地悪で、他の友達にも酷いことをするような性格の悪い友達がいた。その友達とは家が近く、一緒に帰る日もあった。だが、話は全く盛り上がらず、沈黙に耐えながら帰る日の方が多かった。正直に言うと、全然気が合わないのに気まずい雰囲気に耐えるのは、もううんざりだった。『TUGUMI』の物語の中心人物であるつぐみも私の友達と同じく、ひねくれた性格だ。つぐみは、生まれた時から体が弱く、医者が短命宣告をしたため、母親や周りが甘やかしてしまい、ひねくれた性格になってしまった。この本を少し読んだだけでは、つぐみがただ「性格の悪い人」としか捉えることしかできないだろう。私もそうだった。

しかし、つぐみの性格が悪いと私たち読者が感じるのには理由がある。それは、この本の物語の中心人物はつぐみであるが、物語を語っているのは、まりあだからだ。まりあは、つぐみの一歳年上の従姉であり、物語は全てまりあの一人称の視点で描かれている。まりあの視点から見たつぐみの性格が描かれているため、読者も最初だけを読むとつぐみの変わった人柄に驚かせるという訳だ。

だが、つぐみとまりあのように、幼い頃から一緒に交流を深めていく中で、何かをきっかけにお互いの心を打ち解き合い、仲良くなることもある、ただ単に相手と話もあまりせずに、相手のことを自分が勝手に理解したつもりで関わるのではなく、まりあのようにつぐみと積極的に関わることが大切なのだ。私にはそれができただろうか。思い返してみれば、性格の悪い友達とは全然話もしなかったにも拘らず、自分が友達のことを理解したつもりで自分からは全く積極的に行動をしようとしなかった。今思えば、もっと一緒に遊んだり、長い時間を共に過ごしたりして、仲を深め合いたかったと思い後悔している。また、人に対する「偏見や差別」は絶対にしてはいけないと考えるようにもなった。自分の自己肯定感を高めようとして、相手を見下し、区別することは、「人間性に対する立派な犯罪」であると考えるようにもなった。自分自身が正しい理解をするとともに、しっかりと考えて行動していく努力が世の中にもっともっと広がる必要があると思う。私も幼い頃は、話したことがない知らない相手に対して、「あの人、怒ると怖そうだな。」などと、勝手に相手の人柄を想像してしまったことがあり、とても反省している。自分が相手にされて嫌だと思うことは、自分も相手に対して決してしてはいけないということを学んだ時でもあった。

私はつぐみの相手への対応が好きだ。人は誰にでも同じ対応ができるわけではない。なぜなら、年齢による上下関係などで目上の人には敬意を払うなど、礼儀の問題になってくるからだ。つぐみも人によって対応を改める。だが、つぐみは家族か、家族以外の人かであっても対応を変える。私も家では安心して気が抜け、口数が多くなってしまう。自分ではあまり良くないと思っていたことだが、逆に家の中と外で顔が違うことは悪いことと気付いた。家で素の自分が出るということは、自分にとって家が安全な場所であり、周りに気を使わずに過ごすことができると心が認識しているからだ。そのため、家では頑張りすぎずにリラックスするできる環境やストレスを発散していくことが大切だと思う。私の友達も、一緒に家で遊ぶ時は、学校にいる時とは違い、部屋がうるさくなるほど楽しそうに喋っていた。意外と私のように家では「素の自分でいられる」という人が多いのかもしれない。つぐみは、人によって態度を変えることがあたり前であり、決して悪いことではないと伝えてくれているような気がした。

私は、この本を読んでつぐみから人と人との関わりの大切さを学ぶことができた。自分の立場から見て、相手のことが苦手だったり、嫌いであっても、自分が相手の思いやりや本当の性格や全てを理解したわけではなく、「ただ単に相手の一面だけを見て、自分が勝手に判断しただけなんだ。」と考えるようになった。これから人間関係を築く上で心掛けたいことは、相手への「思いやり」の気持ちを忘れないことだ。相手の立場に立って物事を考えたり、客観的に見ることによって、相手の気持ちを理解することができるようになると思う。日常生活で友達と会話をする時には、相手の第一印象で決めつけず、たくさんの友達に積極的に話しかけてみようと思う。

『TUGUMI（つむぎ）』　吉本ばなな著　中央公論新社

光村図書出版賞

日常の楽しみ方

藤女子中学校　二年　楠本　美那

エレベーターの「閉」ボタンについて、ぐうちゃんはこんな旨のことを言った。

「エレベーターにこんなボタンをつけているのは、世界でも日本くらいなものだよ。ほんの数秒の時間を短縮するためだけのボタンなんて。国中で見ると、膨大な電力をこのために消費している。この国は必要以上のサービスをしたがるよね。」

ぐうちゃんの話に驚いていると、当たり前の風景が、いつもと全然違うものに見えてきた。自分にとって当たり前のことが、はたから見るとこんなに奇妙なものなのか。一歩引いたところから自分を見て、いつもの自分を奇妙な目で見つめなおすのは、なんと新鮮で面白いことかと思った。

だから実際にやってみた。自分には当たり前の違和感を探してみて、それを二つ見つけた。

一つは、日本の昔話にかなりの頻度で登場する「いじわるじいさん」だ。彼らは、花咲か爺やおむすびころりん、こぶとり爺さんなどの有名タイトルにおとなりさんとして登場し、主人公の善良なおじいさんに意地悪をする。特に花咲か爺のいじわるじいさんは過激だ。私たちは彼らの存在に何の疑問も抱いていないが、よく考えたらおとなりさんとして最悪だ。毎度当然のごとくご近所トラブルに巻き込まれる主人公夫婦の、なんと運の悪いことか。おとなりさんという立ち位置は主人公と関わりを持たせやすく便利なのかもしれないが、それでも登場率の高さに笑ってしまう。また、紹介文がそろいもそろって「いじわるじいさん」なのも面白い。

二つ目は、ショッピングモールなどのエスカレーター乗り場でえんえんと流れるアナウンスだ。誰も聴いてもいないのに、エンドレスで「手すりにおつかまり下さい」「お子様から目を離さないで下さい」など注意喚起している。こんなことをしているのもまた日本だけらしい。外国人観光客などがその場に居合わせると、何を言っているか分からなくて不安になったりするそうだ。

自分のことの他に、友達の「当たり前の違和感」も見つけた。

その友達の家庭では、ミニトマトのことを「トマト」と呼び、ノーマルのトマトを「ギガトマト」と呼ぶらしい。私は今までミニトマトを小さいものと見ていたが、そうではなく通常のトマトが大きいだけだったのかもしれない。斬新で面白い考え方だった。

ここまでで私は他と比べてズレていることを「違和感」と位置付けたが、「ツッコミどころ」という表現でもふさわしいかもしれない。違和感というとどことなく聞こえが悪いが、これらは日常を新鮮な気付きで彩ってくれる、積極的に探すべきものだ。

そしてこの「ツッコミどころ」を探すことは、自分の視野を広げるうえでも役に立つと思う。自分を客観的に見るということは、自分以外の誰かになりきるということだ。別の立場からものごとを考える力が付くはずだ。

ぐうちゃんの色々な話を聴くうちに、悠太にも「自分でも色々考えてみよう」「様々な視点からものごとを見てみよう」という姿勢が現れてきた。なんだかぐうちゃんに似てきたように見える。少年期に周りの大人から受ける影響は大きいものだ。悠太もいつかぐうちゃんのように、世界中で沢山のものを見て、経験に富んだ豊かな人生を送るのだろうか。そんな期待ができるような悠太の成長ぶりを、物語を通して感じた。悠太の成長が特に顕著だったのは、物語の一番最後ののんちゃんとの会話の場面だ。今までの悠太はのんちゃんと一緒になってぐうちゃんの話を聴く、大人から教わる立場だったが、ここでは妹に教える側の立場に回っている。この立場の変化が、悠太自身の変化を表しているように思えた。自分とそう歳の変わらない男の子の話だが、子供の成長を実感した時のように感動した。

物語の中の人物の思い出や知識や実体験を共有させてもらえる、読書の面白いところを詰め込んだような一冊だった。先にも述べたが、少年期に周りの大人から受ける影響は大きいものだ。しかし、今時の子供達には、家族以外の大人と関わる機会があまりない。私もそうだ。だから、この本で共有できた悠太の体験は貴重なものだった。この本を読んで、擬似的にではあるが家族以外の大人と関わる体験ができ、そこから良い影響を受けられたことを喜ばしく思う。

色々な話をしたが、私が一番言いたかったのはこういうことだ。

「毎日見ている風景も、物の見方一つでいつもと違って見える。他人と比較すると、それぞれの日常に特色が生まれる。周りからの影響を受け入れることで、自分自身もいつもと違うものになれる。見飽きた日常も、やりようでどこまでも楽しめる。」

これから、日常の楽しみ方を沢山探して、楽しい日々を送りたい。

『アイスプラネット』　椎名誠著　講談社

佳　作

◇小学校の部　低学年

自由	「かっぱとともだちになりたいな」	札幌市立新陽小学校	１年	佐々木　土夢
自由	かなしい気もちがちょっとあん心する	札幌市立緑丘小学校	１年	汲田　旬
課題	かぜをきって	札幌市立有明小学校	１年	大内　優花
指定	ようせいのたび	札幌市立桑園小学校	１年	大森　くるみ
指定	すみれちゃんとようかいばあちゃんをよんで	札幌市立桑園小学校	１年	野田　直葉
指定	ようかいじゃないけどようかいばあちゃん	札幌市立白楊小学校	１年	杉森　葵
課題	「いただきます。」ということ	札幌市立真栄小学校	２年	加藤　将吉

◇小学校の部　中学年

自由	ぼくのイッパイアッテナ	札幌市立大倉山小学校	３年	野中　蒼汰
自由	「そいつの名前はエメラルド」を読んで！	札幌市立北九条小学校	３年	岩原　旺佑
自由	星と宇宙のふしぎ１０９	田中学園立命館慶祥小学校	３年	佐原　昊汰
課題	「命のきずな」	札幌市立発寒南小学校	３年	岩本　彩良
課題	川本のひみつ	札幌市立伏見小学校	３年	薬師山　千紘
課題	ぼくとたのちんは正反対	札幌市立南月寒小学校	３年	田之岡　湊斗
自由	人は変われる強くなる	札幌市立北九条小学校	４年	石川　諒
自由	かあちゃん取扱説明書を読んでみて	札幌市立北園小学校	４年	北井　愛彩
自由	願いをかなえるためには	札幌市立北野台小学校	４年	森永　萌々夏
自由	インカ帝国天空の都を読んで	札幌市立円山小学校	４年	範國　美冬
指定	命と心を大切に	札幌市立新陽小学校	４年	早坂　凪優
指定	心を救うとは	札幌市立桑園小学校	４年	針間　彩香
指定	「クマが出た！助けてベアドッグ」を読んで	札幌市立桑園小学校	４年	宮﨑　爽
指定	「きけんなゲーム」を読んで感じたこと	札幌市立美香保小学校	４年	田中　絢萌

◇小学校の部　高学年

自由	自分らしい自分に	札幌市立大谷地小学校	５年	原田　陽菜
自由	「じいちゃんの山小屋」を読んで	札幌市立北野台小学校	５年	中川　華
自由	「T校バスケット部に学ぶチームワークの大切さ」	札幌市立新光小学校	５年	佐藤　美和
自由	折り鶴の子どもたちの願いを引き継いで	札幌市立発寒小学校	５年	安住　匠永
課題	私の弱虫をなおすには	札幌市立日新小学校	５年	益井　桜
指定	蛾と僕の適応	札幌市立桑園小学校	５年	茂木　晃太朗
指定	環境への適応	札幌市立白楊小学校	５年	猪口　誠太
自由	「未来」が教えてくれた事	札幌市立新琴似小学校	６年	小野　優希
課題	いのちのバトン	札幌市立伏見小学校	６年	前田　海音
課題	私が弱虫を卒業するとき	札幌市立本通小学校	６年	齋藤　あさひ
指定	苦手を得意に	札幌市立円山小学校	６年	塩澤　遼太

◇中学校の部　　該当者なし

◇高等学校の部

自由	余命１０年	市立札幌啓北商業高等学校	２年	大井　心和
自由	他人の靴を履いてみる	市立札幌啓北商業高等学校	２年	柴大　稀
自由	泣くな研修医を読んで	札幌聖心女子学院高等学校	２年	谷口　まる

優　良　賞

◇小学校の部　低学年

自由	くふうはたのしい	札幌市立桑園小学校	１年	和　佐　薫
課題	ルーシーといっしょ	札幌市立大谷地小学校	１年	豊　沢　咲　仁
課題	こころをこめて「いただきます」	札幌市立平岡公園小学校	１年	井　川　眞　宏
指定	「きたきつねとはるのいのち」をよんで	札幌市立清田南小学校	１年	田　島　敬　仁
課題	ばあばのためにできること	札幌市立白楊小学校	２年	大　坪　葵

◇小学校の部　中学年

自由	わたしのお友だちとなかよくする方ほう	札幌市立幌北小学校	３年	高　田　瑚　雪
自由	アシュリーから学んだこと	札幌市立真栄小学校	３年	サムソノー　織美愛
自由	理由のまほう	札幌市立緑丘小学校	３年	汲　田　琴
指定	あきらめないゆう気	札幌市立桑園小学校	３年	岡　大　翔
自由	心のあなをうめるには	札幌市立開成小学校	４年	小野　芽衣子
課題	選ぶことは、難しい	札幌市立栄小学校	４年	中　島　裕　菜
課題	ためいきは前向きスイッチ	札幌市立東園小学校	４年	佐　藤　日　和
指定	違いを認め合う心	札幌市立桑園小学校	４年	木　村　暉

◇小学校の部　高学年

課題	百一年間の旅	札幌市立大谷地小学校	５年	豊　沢　峰　々
課題	わたしのしあわせのレシピ	札幌市立発寒南小学校	５年	小　島　愛　奈
課題	祖父が教えてくれたこと	札幌市立藻岩小学校	５年	門　田　歩　惟
自由	本日も夢いっぱいでございます	札幌市立清田緑小学校	６年	東　地　賢　頼
自由	カラフルな存在を包み込む希望の色	札幌市立日新小学校	６年	仁　木　安　寧
自由	ふうちゃんの声が聞こえる	札幌市立伏見小学校	６年	前　田　海　音
指定	家族の笑顔を力に変えて	札幌市立厚別北小学校	６年	鈴　木　爽　太
指定	「一冊の絵本」から考えさせられたこと	札幌市立桑園小学校	６年	伊藤　尚太郎

◇中学校の部

自由	普通を越える一線「トリガー」	藤女子中学校	１年	中　山　夢　乃
自由	人生の道しるべ	北嶺中学校	１年	南　部　佑　心
課題	私はまだ変化の途中	札幌市立厚別北中学校	１年	佐々木　碧
自由	「アドリブ」を読んで	札幌市立新川西中学校	２年	佐　藤　奈　央
自由	平和への願い	札幌市立澄川中学校	２年	小　野　光　咲
課題	北斎が呼びかけている	北嶺中学校	３年	前　田　海　杜

◇高等学校の部

自由	消費生活と私たちにできること	札幌光星高等学校	１年	加　藤　千　尋
自由	収容者と現代人	札幌聖心女子学院高等学校	３年	夕　田　桜　子

第６８回　札幌市読書感想文コンクール
入　賞　者　一　覧

令和４年度

札幌市長賞	札幌市立向陵中学校	２年	中本　夏央子
	自由	ネガティブの美点	
札幌市議会議長賞	札幌光星高等学校	２年	野崎　幸子
	課題	その扉をたたく音を読んで	
札幌市教育長賞	札幌市立簾舞小学校	４年	バーン　アルバ優花
	自由	「未来へのアクション」	
札幌市学校図書館協議会会長賞１	札幌光星高等学校	１年	白石　胡実
	自由	本当の友だちとは	
札幌市学校図書館協議会会長賞２	札幌市立桑園小学校	６年	杉田　知優
	自由	思いをかなえるために	
札幌市学校図書館協議会会長賞３	札幌市立信濃中学校	１年	坂本　温音
	自由	医師になる覚悟	
札幌市ＰＴＡ協議会会長賞１	札幌聖心女子学院高等学校	３年	目良　茉莉香
	自由	「夜と霧」を読んで	
札幌市ＰＴＡ協議会会長賞２	札幌市立新川中央小学校	１年	山田　朝陽
	自由	「かしたつもり×もらったつもり」をよんで	
札幌市ＰＴＡ協議会会長賞３	札幌市立向陵中学校	２年	岩永　千結子
	自由	兎の眼に映るタカラモノ	
北海道高等学校ＰＴＡ連合会石狩支部長賞	札幌光星高等学校	２年	櫻井　麻央
	自由	まだまだプロローグ	
光陽社賞	田中学園立命館慶祥小学校	４年	水柿　連太朗
	課題	ため息からの再出発	
キハラ賞	藤女子中学校	１年	江口　陽加李
	自由	平等に生きるということ	
教育出版賞	札幌市立南月寒小学校	６年	河口　留偉
	指定	色々な色の中のぼく	
北海教育評論社賞	市立札幌啓北商業高等学校	１年	懸谷　一花
	自由	表情は言葉	
図書館ネットワークサービス賞１	札幌市立厚別北小学校	２年	佐々木　英俊
	課題	数学でりょうりを見ると	
図書館ネットワークサービス賞２	藤女子中学校	１年	田中　結衣
	自由	つぐみから学んだこと	
光村図書出版賞	藤女子中学校	２年	楠本　美那
	自由	日常の楽しみ方	

学校賞

毎日新聞社賞　藤女子中学校
札幌光星高等学校